23　島村鼎甫とウイリス及びボードウインの『日講紀聞』

津下健哉

ウイリスは英国公使館医官として文久二年横浜に着任、生麦事件を経験、慶応四年には鳥羽・伏見の戦いに出張、次いで北越戦線に従軍、クロロホルム麻酔等を用いて傷病者の看護に当たり、年末には江戸に帰る。翌明治二年一月には新政府のもと東京医学校兼大病院が設立され、三月にはその院長に就任、患者の治療に当たると共に講義を開始するのである。その講義録が『英医偉利士氏口授―日講紀聞』なるもので官版日講記聞の最初をなすものであろう。

語学の天才司馬凌海が口訳、これを石黒忠悳が筆記、これを校正、整理、印刷にもっていったのが題言を書いている島村鼎甫であろう。題言に言う『明治二年夏、秋に至り漸く落ち着いて来たので毎朝講義を開き、これを筆記、校正、編集して日講紀聞となづけた。在寮生徒の便利のためのものである。内容はサイムの外科書により、傍ら自験の説を加えたもの』と言い、『明治二年十月、島村少博士識』として外科編、炎症病から述べている。一読して彼が以前に出した『創夷新説』と文の構成、言い回しなど極めて類似しているが内容が同じ問題だからであろうか。

さてウイリスの日講紀聞は二編のみで間もなく相良、岩佐らの提言で我が国医学もドイツ医学の導入が決定、明治二年暮れには横浜を離れ、鹿児島に向かうこととなる。

ウイリスの去ったあとドイツから予定していた医官の来日が普仏戦争のため遅れ、満校の生徒大いに失望、時にたまたま大阪医学校の教師ボードウインが満期となり帰国のため横浜に来ていたのを無理に願って東校での講義をお願いする。講義は明治三年七月から十月頃までであったようで、『和蘭医官抱獨英氏口授―日講紀聞』六冊が出版されているが、これも題言は島村鼎甫であり、『明治三年冬閏月　島村少博士識』としている。恐らくは以

前門人であった相良、岩佐の両名が強引に頼み込んで暫く止まり生徒への講義を依頼したのであろう。『則ち皤々たる老翁涙を垂れて固辞す。然れども生徒欽暴の状甚だ切なれば決然去るに忍のびず遂に二ヵ月留まるを可す。』と記載されている。さてボードウインは文久二年来日、始め長崎の医学校で講義、慶応三年一時帰国、明治二年二月からは大阪の仮病院で講義を開始するがこれは『大阪医学校、抱獨英口授―日講紀聞』十一巻として出版されている。内容は陰具編で泌尿器、膀胱疾患、それに梅毒編等で時期的には東京での講義より先のものであろうが、出版は明治二年十二月、緒方郁蔵作とのこと、但し私の見た岡大のものには題言が無かった。

さて大学東校での講義は神経編第一―二三課、飲食消化編第二四―四二課のそれぞれ三冊で論述は極めて詳細、整然とし、荷物は既に発送、筐中また一冊の本も携えるなくこの様な講義の出来たことは今から見ても驚きであり、……ヲ論ス』とする鼎甫の翻訳時の癖も現れ興味深い。ボードウインの講義は極めて感銘深いもので鼎甫も題言の中で、『今や帰心箭の如きも、風寒雨濕も厭うなく淳淳生徒を教える倦まざる者学者道を思い材を愛するの深きに由ると雖も亦温厚篤実の人に非ざれば何ぞ此の如きを得んや、我等感服の余り此処に一言し読者に其美を賛揚せざるを得ず』としている。

さて島村鼎甫の訳書としては生理発蒙、創夷新説が有名で、ウイリス、ボードウインの日講紀聞について触れられることは余りないが、日本の医学が蘭学から獨学への移行期に当たって極めて重要な意義を有するものと考えられる。その訳には司馬の口訳と石黒の助力があったのであろうが、題言を書く立場にあった鼎甫の役割と意義は極めて重大であったであろう。Bowers著のWilliam Willisの中にもThe Nikko Kibum (Japanese lecture record) by Shimamura Teiho　の記録がある。

（広島手の外科・微小外科研究所）